

【学会レビュー】

日本レジャー・レクリエーション学会第39回大会

(江戸川大学, 2009年11月27~29日)

土屋 薫

師走を目前に控えた11月27日(金)・28日(土)・29日(日), 本学において今年度の学会大会(第39回)が開かれた。この学会は, レジャー・レクリエーションに関する科学的研究と発展をはかり, 実践への寄与を目的として1971年3月に設立された学術研究団体である。今年度は「生態系資源と文化的資源をつなぐライフデザイン——架け橋としてのレジャー・レクリエーション——」を大会テーマとし, 第1日目と第2日目が一般に公開された。

第1日目(27日・金)の地域研究は, 「旧葛飾郡エリアのレジャー・レクリエーション資源探訪」と銘打ち, 都立水元公園(旧南葛飾郡: 現東京都葛飾区)から, 流山おおたかの森(旧東葛飾郡: 現千葉県流山市), 利根運河(旧東葛飾郡: 現千葉県流山市・野田市), 首都圏外郭放水路(旧中葛飾郡: 現埼玉県春日部市)をまわった。「かつしか」の郡は律令制の時代に定められ万葉集にも読まれているが, 江戸川大学のある「東葛」地域も川によってこれらの流域と結びついていることをあらためて意識させられた。

第2日目(28日・土)のシンポジウムは三部構成だったが, 第一部のセッションA・第二部のセッションBとも, メインスピーカーが話題提供したのちゲストスピーカーがさらに具体的な事例紹介をし, 最後には3人で意見交換をする, という形が取られた。

セッションAは「親水レクリエーション&スポーツ」と題して進められた。メインスピーカーの庄司邦昭氏(東京海洋大学)は「船を通した川とのつきあいかた」というテーマで話題を提供さ

れ, さらにゲストスピーカーお二人が登壇された。郡司俊雄氏(江戸川大学)は, 流山市から柏市へと流れる大堀川におけるカヌー実習について報告された。また遠藤大哉氏(NPO法人パディ冒険団代表)は, 湘南の海で展開されているライフセービングと冒険スクールの報告をされた。総じて実践の場をつくりあげることの意義と難しさが提示されたと言えよう。

セッションBは「世界の水辺空間&都市開発」と題して進められた。メインスピーカーの樋口正一郎氏(美術家・都市景観研究家)は「水辺空間の現在——ソウル・ロンドン・バーミンガム——」というテーマで, 都市開発における水辺空間の重要性について, 世界の先進事例を紹介された。続くゲストスピーカーの恵良好敏氏(NPOさとやま理事長)は「おおたかの森」, 新保國弘氏(東葛自然と文化研究所所長)は「利根運河」周辺の魅力と成り立ちについて紹介された。ここでは, 流山市周辺の魅力と地域づくりの核となる資源について, あらためて刮目させられた。

第三部である総括セッションは, セッションAとセッションBを踏まえた上で, 「ひとがリピーターを育み, リピーターがひとを育てる——着地型観光に学ぶ地域の誇り——」というテーマでパネルディスカッションが進められた。パネリストは庄司邦昭氏, セッションAのコーディネーター後藤新弥氏(江戸川大学), 樋口正一郎氏, セッションBのコーディネーター恵小百合氏(江戸川大学・江戸川大学総合福祉専門学校), 小高静子氏(流山ガーデニングクラブ「花恋人——かれんと——」代表), 井崎義治氏(流山市長)の6

名で、モデレーターは電通OBで流山市在住の行政コミュニケーションアドバイザーである梅谷秀治氏であった。

これは、地元発信による「着地型観光」という概念とそれに触発された「リピーター」（つまり観客としての「第三者」）の存在が、これからの地域づくりの鍵になる、という「落としどころ」を踏まえた構成だと思われる。ただし、流山ガーデニングクラブ「花恋人——かれんと——」主催による春のイベントである「オープンガーデン」（自宅庭園の無償公開）に、平日3日間で6,000人以上もの来場者があった、といった情報の周知が必ずしも十分でなく、多少消化不良の感もあった。もちろん、「豊かさの実現」にむけて、「地域資源を生かした交流人口増大を組み込んだまちづくりが有効である」という視座を提示し得ることこそ、この学会の面目躍如と言ってもいいだろう

か。

第3日目は一般には非公開の研究発表であったが、「緑地・公園整備」から「テーマパークのイベント戦略」「健康福祉」「セラピューティックレクリエーション」「レジャーアセスメント」といった多様な領域からの口頭発表・ポスター発表が行われた。

最後に、第2日目の夜に本学サテライトセンターで行われた懇親会において、多数の参加者から「流山の価値と魅力を再認識した」という声をいただいたことを報告しておきたい。

また大会実行委員として、大学からの人的・物的各方面での支援があっはじめて本大会が無事開催に漕ぎ着けたことを付け加えるとともに、あらためて関係各位にお礼を申し上げて筆を置きたい。